

虹と日本文藝 (九)

——北辺・南島文献をめぐって——

荻 野 恭 茂

小 序

十数年前に一念発起し、中国の古代に第一步を印しつつ踏み入った、海外の古代を中心とした〈ニジ〉涉獵の旅路よりやつと母国・日本に帰還した。「日暮れて道遠し」、ほっとする間もあらばこそ、懐かしい母国・日本の文藝における〈ニジ〉探訪の仕事にかからねばならない。はたしてどんな〈ニジ〉が待ち受けていることであろう。胸の高鳴るのを禁じえない。そして、ひとわたり海外を見てきた目に日本の〈ニジ〉は、またどのように映ることであろうか。興味は津々として尽きることがない。

ただここで、一つ断っておきたいのは、前部・比較研究資料「通考」の所でも考察してきたが、大和ことばでいう〈ニジ〉・アイヌ語の〈ラヨチ〉に相当するものと、始原を一部共有し^(注1)つつ、また史上、時として混同して認識されてきたものに「龍」リウリウリュウ^{注2}ドラ

ゴン 大和ことばでいう「タツ」がある。これは、「比較研究資料・通考」中でも触れてきたように、古代中国においても既に、混交・混在・並列、状態にあつたもので、これを完全に視野に入れるとなると非常に複雑になつて茶畑^{注2}に入りこんだようになる恐れが予想されるので、日本文藝においては、おおむね〈ニジ〉を主体とし、それにそのメタファー・見立て的表現になるもの、異名と思われるものを加え、「龍」系の方は必要に応じ補助的に調査・注考を試みることにする。

その記述の体裁は、おおむね第Ⅰ部のそれにならいつつ、同時に同部・資料ならびに私註と関連づけつつ、また作品の表現と絡ませつつ、比較文化的視点よりのものを主とした私註的「考」察を加えていくこととしたい。

(注1) 〈ニジ〉的要素に、「雷」＋「電光」的要素が加わってワンセツトとなり、文化的には別系的に進展・成長を遂げたものである。

(注2) 日本では「龍」の和名が「タツ」であり、(ニジ)のたつ(瀧)に「龍神」様を祀ったり(ニジ)の出現を「ニジがタツ」といったり、その「タチモノ」が(ニジ)そのものであったり、かなりの混乱がみられる。因みに(ニジ)と「ヘビ」とも同様な関係が見られ、「金のたまる財布」において混交する。「ヘビの皮を入れた財布はお金がたまる」(ニジ)の五色または七色の帯のある財布はお金がたまるとの俗信が現にある。

《参考》

〔倭名類聚抄^{十九}〕龍 文字集略云、龍^{力鍾反、和名太都。}四足五采、甚有^二神靈^一者也、白虎通云、鱗蟲三百六十六而龍爲^二之長^一也、

〔延喜式^{二十二}〕祥瑞。

龍^{被五色以遊、能幽能明、能小能大、}○中略

右大瑞

381

- 1510 Ukāmpeshkaunkur ウカムペシカビと (1)
aarkotōnka なるらしく
rān tūlkata 降りきたると共に
rayōchirēu ne ^(注1)虹霓のうねりを成して
ikūrkashike わが上へ
kotāmetāye, 太刀を引きたり。
Kashirari⁽²⁾ すぐ續きて
Ukāmpeshka wa ウカムペシカより
kamūi ēk hum 神の來る音

(2)

tūriminse, 鳴りとよみて
repunkur yūpi 沖つ國の兄
kūrkashike が上へ
nīshpa suyēp 首領の振る太刀
rayōchirēu ne 虹の如くうねりて
korēukosānu. うねり落つ。

1540

Shinē ōkayo (味方は) たゞひとりの男 (3)
anēp ne kōrka に我あれど
a-tūnash-shuyēp わが迅く振る太刀
rayōchirēune. 虹のうねる如くにて、
utūrātūra 相共に(彼等は)
atēk-utūru わが手のひまを
atām-utūru わが太刀のひまを
chīpeshishpārepa. 水の如くに抜けて逃ぐ。

3090

私註 (一) Yūkar^(注2) (ユーカラ) (二) 「虎杖丸の曲」(1)連=1510~1515行、(2)連=1532~1540行、(3)連=3083~3090行 (三) Yūkar アイヌ口承・英雄詞曲 (四) 成立=八世紀~十三世紀ごろ、以降(知里真志保説) (五) 伝承者=沙流のワカルパ+新平賀の九十端ウテカン 記述者=金田一京助 (六) 金田一京助著『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』第二冊(昭6、東洋文庫) (七) (1) P 329 (2) P 331 (3) P 415~416
〔考〕成立は知里説によると(四)の如くであるが、「ユーカラを単なる民族的英雄説話として歴史的事実の裏付けなど認めない」金田一説もある。知里説は「北海道を本拠とするヤウン・クル(内

陸人、北海道本島アイヌ」と大陸の方から海を越えてやってきて、北海道の日本海岸の中部からオホーツク海岸の各地に橋頭堡を確保して住んでいたレブン・クル（渡来の異民族）との民族的な戦争の物語（実戦の物語）とし、ユーカラの内容をなす民族的な葛藤は、オホーツク式文化が本土海岸に栄えた年代（今から凡そ一三〇〇〜八〇〇年前の五百年間）で、ユーカラが文学として成立するのは、その以後で、民族の苦難を克服して意気軒昂たる平和建設の時代であつた。（久保寺逸彦著『アイヌの文学』による）とする。本土における軍記物語『平家物語』等のケースを思い浮かべれば一応納得がいく。また、新谷行は、「……体験を通して創造された物語である」としながらも『ユーカラの世界——アイヌ復権の原点——』（昭49・角川書店）中に「ただ、ここでもう少し考えておかねばならないのは、一つは擦文文化——アイヌの文化——の前身と考えられている北海道の縄文文化が、一方では本州の縄文文化に関連があり、一方では琥珀の首飾（約二千数百年前のものといわれる）でみられるように、大陸と大いに関連があるということである。そしてもう一つは、擦文文化そのものが本州、北端に明らかにその痕跡を残し、本州との関連において近畿地方に国家を作つた大和朝廷の北辺侵略が気になる。大陸との関連についていえば、考古学者は琥珀文化の一方的な北海道流入を考えているようだが、一方的な流入というより、われわれが現在考えられ得るよりもっと大きな、いわば先史時代の宇宙感覚で大陸との交流が積極的に行われていたのではないか。……少なくともここでは、ユーカラの世界がそういう大きな宇宙感覚で展開され、あるいは先史時代の記憶が断片的な結晶となつてユーカラの中に混入されていることを喚起しておきたいのである。」との指摘は、

（ニジリヲヨチ ratchu）を考えると傾聴に値する。

アイヌは、人類学上は「ヨーロッパ人種」の一分脈に蒙古人種の血を混えたもの」（『広辞苑』）であるが、わが国の歴史上では、エミシ・エゾ・エビス、と呼ばれており、大和朝廷の北辺侵略については、『日本書紀』に安倍比羅夫遠征の記事、斉明天皇四年（656）年（656〜658）があり、津軽海峡を渡つたかどうかは定かでないが、各地の蝦夷を征服し、降服したものの中では、七月には蝦夷二百人が朝献している。すなわち、アイヌ文化の接触は、文献的にも確かにあつたのである。なお、アイヌは、鮭をとつたり農耕も少しはするが、狩猟生活を主とし、文字を持たないが、アイヌ語は、言語学者によれば、系統的には古アジア語群 Paleo-Asiatic Group of Languages に属し、アメリカインディアン・エスキモー・アリュート（以上、アメリカ大陸）、チュクチ、カムチャダル・コリヤーク、ユカギール（以上、北東アジア）等の言語と親縁関係にあると見なされ、形態的には、抱合語とか、輯合語と呼ばれ、動詞活用が最も変化に富み、これに主格の人称接辞や目的格の人称接辞がつき、さらに、副詞や名詞までも、その動詞を中核として抱合されて、一語さながら一文をなすという珍しい型のものとして、およそ日本語などとは縁遠い言語と考えられている（久保寺逸彦著『アイヌの文学』の序より）のである。まさにその通りで、（ニジ）系の、朝鮮・沖縄や日本本土とは異なるのである。とすると、（ヲヨチ）は、本土にみられる（ヲロチ）系——先史時代の残留、あるいは大和朝廷との交流による——と同根ではなからうか。ヤマタの（ヲロチ）のしつぽから出てきた「天叢雲劍」が憑神の劍である如く、この物語の題名の「虎杖丸クボネシリカ」も英雄ポイヤウンベの危機を救う憑神の宝劍である。

そして、「知里氏の『アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する研究』によれば、虹もまた魔物と考えられ、人を見ると追いかけてくることがあり、虹に追われた者は仮に助かっても貧乏になるといわれる。虹（ラヨチ）はもととも天を支配する神の妹であつたが、エシムケブというものを本当は白い蓍麻で作らなければならぬのに、いろいろな色の布を集めて作ったのでその罰として魔神にされてしまったのだといわれる。」（新谷行著『ユーカラの世界』）そうである。「虹（ラヨチ）」は、♀（妹）となつてゐるから中国風にいえば「蜺（霓）」であろう。金田一の(1)の訳は「虹霓のうねりを成して」と、このことにはあまりとらわれていないようである。ともあれ、虹が魔物にされてしまった説話は、ある時期以降のものであろう。すなわち、(善)神と魔神の対立するシャーマニズムの二元観成立以降のことであろう。それ以前、遙か遠い先史時代の痕跡としては、善神・魔神を総括して考えられるような(神秘的な力)ではなかったか。本土に残留する(ヲロチ)（本土での別語、「ヘミ(ビ)・ノジ(ニジ)」を指す）と同類の。(1)「虹霓のうねりを成して」、(2)「虹のごとくうねりて」、(3)「虹のうね、ごとくにて」、の(敵味方両方の)太刀の動きの比喩 (1)メタファア的 (2)(3)シシミリー) による修辭の彼方にそれを透視できるように思える。それは狩猟生活中に目にする「うつしみのいのち」であろう。そして、この比喩が使用されるのは、対象に物凄く怒り憎しみを抱いて太刀を振りおろす場面に限るのであつて、黄金のラツコを追いつつ太刀を振りおろすような場面には使われていない事からも納得される。(例、1080行前後)

満州語に、[Nioron にじ] (1. 天文五: 虹霓) — gociंगा loho 双光虹の如く流れ散る刀 [補1. 軍器一: 流虹刀] Niorongo dabhangga

500 双光虹の如き刀 [補1. 軍器一: 粉練刀] というのがみられるが、地理的狀況からしても、先史時代に何らかの交流があつたことも考えられる。

なお先引「虹説話」中、「虹に追われた者は仮に助かっても貧乏になる」というのは、中国の吐金説話や西洋や日本各地に見られる虹脚埋宝説話と対極にあるものであり、これが呪文によつて解消されたとしても、積極的夢のあるものではない。また、「いろいろな色の布」は、いわゆる「虹色」を指すのであろう。

(注1) 服部四郎論『アイヌ語方言辞典』(昭39、岩波書店)によると、(Ch は c 表記になつてゐるが) [rawoci] は美幌方言、[raoci] は宗谷方言、[rayoci] は、幌別・沙流・帯広・旭川・名寄方言、[rayoci] は樺太(ライチシカ)方言、[rayuci] は八雲方言、[rayunchi] は千島方言、とある。

(注2) Yoka の語源は、Tuka (ニ「物を・事を」、Eka「互いになす」) で、詞曲のヒーローの言動を、伝承者が、言葉をもつて模倣し再現する意味であろう。——(久保寺逸彦『アイヌの文学』(岩波書店)より) その発生は石狩川付近という。

(注3) 同様な見解が、柴田治呂著「カムイから神へ——アイヌ語は日本語の源流だった」(平3、筑摩書房) にみられる。

(注4) ラヨチ rayochi が、天神の「妹」であることは、中国の伏羲と女媧との關係に類似する。すなわち、ラヨチと女媧とは「妹」という点において共通している。(「女媧——(媧) 音瓜。伊川先生曰。婦居尊位。或云。女媧氏伏羲妹也。」「十八史略」卷之一——『漢文大系』五、新文豊出版公司) また、「伏羲の後とも妹とも伝えられている。」(近藤春雄『中国学芸大事典』) とすると、(考) 中所引の新谷行説、すなわち「先史時代的宇宙感覚で大陸との交流が積極的に行われていたのではなからうか」が、にわかに氣に

なつてくる。一応、この説を許容したとすれば、伏羲と女媧とは、
 王墓(Ⅱ7)《注一》に見られるごとく人身蛇尾である。すなわち
 「蛇性」が濃厚である。とすると、やはりラヨチも又「虹蜺のうね
 り」の表現のごとく「蛇性」ヲロチ」であろう。
 (注二) 羽田亨編『満和辭典』(昭47、国書刊行会)

382

nehikoraehi	忽ちにして
kane shinta	黄金の神駕
shintā ka wa	神駕の上より
usat rayochi	焰の虹
chi-hopunite	燃え立ち
shirki awa,	たれば、
Samai-un-kur	サマイウンクルの
kor kotanu	領る村は
kotan-pakehe	村上より
kotan-kesehe	村下へ
nui-ko-terke	焰燃え移り行き
nea kotan	その村の
kotan unahi	村居の跡には
uhui nichicha	焼け柱
chi-hetukure	残り立つのみ
ash ruoka	我が後を
nukar kane kor	見つつ
Rikun-kanto ta	天つ空なる

a-un-chise ta わが棲家に
 ikesui-an wa 憤りつつ
 apa-an ruwe. 帰り来れり。

私註 (一) Yukar (ユーカラ) (二) 雷神 Kama-kamu 自叙の神謡
 (三) Kami Yukar アイヌ口承・神謡(四)? (五) 記述者久保
 寺逸彦(六) 久保寺逸彦著『アイヌの文学』——岩波新書939——
 (昭52、岩波書店) (七) P 135-136 (八) この神謡の筋は、雷神が、
 人間の世界を見物に赴き、沙流川沿いにあるアイヌラックルの村
 とサマイウンクルの村を訪れる。アイヌラックルの村では、村長
 の命を村人がよく守って、家の中に入って謹んでいるが、サマイ
 ウンクルの村では、同じく村長の命があつたにもかかわらず、不
 敬な振る舞いをした女が二人いたので、(雷神は怒って)、これを
 罰したというのである。
 [考] 雷神の物凄けい怒りを表現する所に(虹)が援用されている。
 すなわち神駕の上から燃えたつた焰の(虹)が、村上より村下へ
 と、めらめらと長々と燃え移って行き、村を焼き尽くす。そのさ
 まは、まさに(ラヨチ)の行状である。あるいは(ヲロチ)のよ
 うな行状である。その中には、人を畏怖させるべき太古的怪威神
 威が込められている。すなわち落雷現象の中に(ラヨチ)を詠み
 込むことによつて、この詩に神謡としての「力」と「生動感」を
 付与することに成功したのである。前掲英雄詩曲中の「虹霓のう
 ねりをなして」「虹の如くうねりて」と共通する面もあるが、その
 景の大ききゆえ、その大蛇的イメージは、神謡らしくより強大で
 ある。そして、(虹Ⅱラヨチ)は、(雷電)と、密接な関係を保つ
 ていることに注目しておきたい。

そして何よりも、この地方色豊かで、狩猟者の感覚とシャーマニズム的世界を基盤としつつ、「咽せ返る様な異教の匂い」(金田一「ユーカラ概説」)を放つ「ユーカラ」も、他ならぬ日本古典文藝の一ジャンルであり、成立時はともあれ、作品中には先史時代の痕跡を内蔵しているものであり、その一つを、いみじくも「Hayochiのうねり」に見るのである。

なお、ユーカラの(虹)の類型的なものを、「虹と日本児童文藝」中、「昔話-I」(資料)として掲げ小考を付した。

391

偕て虹に関する琉球諸島の方言を調べて見ると、凡そ三種の形式がある。其の第一はニジ形式の語で、第二は天に棲息する動物とする形式の語、第三は雨に関係あるものとする形式の語である。是等の中最も多く用ゐらるゝものは第一形式の語で、他の第二、第三形式の語は比較的に少い。今便宜上第二、第三形式の語から述べる。

第二形式の語の例を求めるならば、宮古島のティン・パウ(tin-pau)と、小浜島のチネー・ミマンチイ(tine-minansi)とである。前者はてんへび(天蛇)の意味で、後者は「天の蚯蚓」と云ふ意味である。両者共動物は違つてゐるが、其の形状の酷似して居る所に同様な感覚の存することを認めることが出来る。宮古島には素より蛇は棲息してゐない。併しながら蛇に対する民族的意識と理解とは充分之を有して居る。これあるが為に頭上高く弓張る虹を見て「天蛇」と呼んだのである。又これのみならず、宮古島には蛇に対する信仰が大に行はれてゐる。御嶽(神社)の主神にさえ之を祀り、而し

てこれには三輪山伝説に酷似した話がある。小浜島の「天の蚯蚓」と見たのも甚だ面白いことで、蚯蚓の中でも殊に大蚯蚓は其の肌色の奇しき迄に虹色を帯びてゐるものである。是等は何れも動物の種類に拠らずして全く其形態或は色彩等に感じを得てゐるのである。

次に第三形式の語は、新城島のアミ・ファイ・ムヌ(ami-fai-mumu)與那国島のアミ・ヌミヤ(ami-numi'a)等である。前者は「雨を食ふ者」、後者は「雨を飲む者」と云ふ意味である。「食ふ」と云ふことは必ずしも固形物の場合のみに限らない。液体の場合にも用ゐてゐる。例えば飲酒家をサキ・ファイヤーと云ふが如きである。これは「酒食ふ者」と云ふ意味である。而して雨を飲み、雨を食ふ者と考へることは矢張り虹を動物視してゐる訳である。そうして是等の言葉の裏面に隠れて居る動物は何であるか、新城島にては雨が降らうとして降らなければ、虹が喰つたと云ひ又其虹は大龍の化身であると信じ、更に大龍は蛇の千年の歳月を経過したものだといつてゐる。序に石垣島の俗信仰では雨を飲むと云ふよりも寧ろ、河海井戸等の水を飲み干すものとせられてゐる。これも或は天蛇と見てゐるのかも知れない。兎に角何れにせよ、是等の島人の間には虹を莊嚴なるもの、神聖なるものと観てゐることは確かである。

最後に第一形式の語は、北は大島より南は八重山まで、琉球全島に亘つて行われている。

私註 (一) 沖縄諸島の(ニジ) (二) 「虹考」中 (九) (三) 論文 (四) 大正十四年八月 (五) 宮良當壯 (六) 『國學院雜誌』31卷8号 (七) P 48・49 (八) 沖縄諸島の文化は、特に古代日本の文藝に色濃く影響を及ぼしている、又は底流に共通のものが見られる、ことは、現在ではほぼ定説になつてゐるので、第一次文献ではな

いが、調査時が大正期であり、比較的古態を温存していると思われる沖縄諸島の言語を中心として研究された、宮良当壮論文「虹考」の一部を抄出させていただいて、日本文藝を考える上での、一つのよすがとした。元稿中の旧漢字は常用漢字に改めたものもある。

〔考〕第三形式の「ニジ」は、水を「飲む」という点では、シベリアの伝説〔20〕参照）や、古代中国の、遙か殷代（1300 B.C.）の甲骨文字に既に見られ〔1〕私注参照）、古代朝鮮半島の『三国史記』中の「白虹飲于宮井」〔21〕参照）、アフリカ大陸の、いわゆる奴隸海岸地方に住むヨルバ族（Yoruba）の「虹蛇（rainbow serpent）」は、大空の中に水を飲むために大地から現れてくる。〔注2〕、同じく西海岸地方のエウエ語族（Ewe-speaking tribes）の「虹蛇はその尾でもって海中に立ちあがり、それが現れてくるときには、身を屈曲させて水を飲むのである。〔注3〕、と共通するが、沖縄（新城島・与那国島）の場合は、「水」の中でも、特に「雨」を飲むのである。ここに特色がある。『南島歌謡大成』を閲すると、その中に多くの「雨乞い」の歌謡に逢うが、これら島民の祈りとは逆に、そのネガティブな意味合い（雨を食う）を「ニジ」に感じていたのである。雨が晴れ上がる時に、「ニジ」が出現することの矚目による発想であろうか。（石垣島のものが普遍的である。）

第一形式の「ニジ」は、「ニジ（古語ヌジ）の語源を、蛇類の総称と推断したナギ（ナジ）に求めることが出来る」と元稿中縷々考証されている。これを容れ、前蹤資料〔1〕〔2〕と比照し、「天の蚯蚓ニチネーミマンチイ」を親族的発想とすれば、概ねシベリア・古代中国・朝鮮等の「ニジ」虹蛇と観と共通するようである。そして、結局は、太古におけるグローバルな「ニジ」観に吸収され

うる性質のものであろう。ただ、第一形式の「ニジ」は、語源的には、古代日本本土の「ニジ」ノジに關する田村宏氏の朝鮮語源説と共通語園的に相容認されうるものかも知れない。そして、当然これら二者——沖縄・朝鮮・日本本土の——「ニジ」は、漢字渡来以前からのもので、渡来以後も、中央における一部有文字階級の人々を除く一般無文字階級の人々の間、または、漢字は知っていても、中国古来の抱合概念を知らず、ただ機械的に「ニジ」を「虹」の漢字に置き換えただけの人々の間では、「虹」の抱合概念である、「日旁氣」とか「暈」〔5〕参照）は含んでいなかったことであろう。因みに、漢語の「虹」はコウ〔6〕であり、わが国北方のアイヌ語では、「ラヨチ（rayochi）」であるから、まさに異質である。「ラヨチ」は「オロチ」（＝大蛇）と同根かも知れないとすれば、宮良説沖縄第二形式中の「ティンバウ」（＝天蛇）と合流しよう。『和名抄』に見え現在も勢力を張っている「ヘビ」の原形——M—B音相通——「倍美（ヘミ）」は、また別系であろう。同一物に対してかく種々な語の存するのは、日本本土の民族と言え、数十万年の間には、種々な種族が、重層・累層を含めて錯綜して存在してきたからであろう。

さて、この「ニジ」語と沖縄文藝との関連であるが、沖縄の有名な狩俣の「創始神話」に「シマテダ（母天太）」という母神が、毎夜枕上にひとりの青年が座ると夢見、懷妊する。その後その青年の素姓を知ろうとして、その右肩に糸のついた針を刺しておくことによって、彼が大蛇であることを知る。その後、数カ月して彼の予言の通り男の子が生まれるが、その朝、大蛇は七光を放つて天上に舞い上がって消えた。」というのがある。この大蛇の生息はまさしく「天蛇」であり「ニジ」語の原内容である。

しかし、沖縄文藝中、本格的なもので、王朝文化の花と目され、沖縄の万葉とも呼ばれる『おもろさうし』はと見ると、仲原善忠・外間守善共著『おもろさうし辞典・総索引』（昭53、角川書店）を閲した所では、第一・二・三形式とも総て登場していない。その流れを汲む（比較的新しい）琉歌にはわずかに（2首）見られる。
 (39)参照 これらのことは、本土の万葉・勅撰和歌集を考える上に興味ある比考事実である。

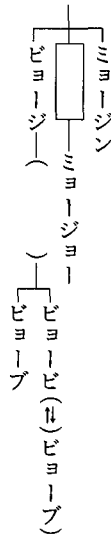
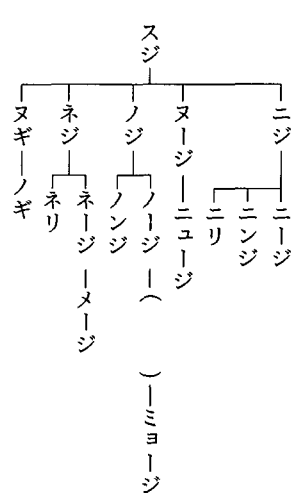
(注1) (注2) フンク・ワグネル両著者前掲辞書。資料35。

(注3) 「三分観の一考察——平良市狩侯の事例——」『琉大史学』第4号、昭48・6。

(注3) 「ナギ」は、「ナガ（長）キ」ものを表す語根で、「ナガ（長）シ」、「ナガ（流）ル」、「ナガ（眺）ム」、「ナガ（長）蟲」、「ムナギ」の語を得るといふ。（宮良説）「クチナハ」、「ナブサ」（私解——ナガフサの略か）も同類か。——柳田国男「青大将の起源」参考。また柳田国男によると、ヌジ・ノジ・ニュージ・ミョウジ等種々 本土における地方音をあげつつ、中央で確立した（ニジ）の方が新しい、すなわち、「ニジ」が一番古い言葉で無いと云う事は可成有力に了解される。」といひ、それら（複雑な音）は五十音図を定める時に整理され（ニジ）となり、中央で見られない様な音の存在は整理されなかった地方に残っているものだ——という。

「虹の語音変化など」・「国語史論」（柳田国男全集）所収

(注4) 宮良當壯作「沖縄諸島におけるニジ語変化状態表」。
 なお、久徳高文「憶吉南波記」の（虹雲の間）中に、「沖縄都ホテル地下一階の宴会場の一つは、「虹雲の間」と名付けられている。この「虹雲」の漢字の部分にローマ字で「NUJIGUMO」と書き添えてあった。我と我が目を疑って幾たびも見直したけれど、「NUJI」は「NUJI」であって、けっして「NIJI」ではなかった。万葉集に



ただ一語だけ伝わる東国の古代方言が、沖縄ではりっぱに現代語として通用しているわけである。ここに、時間と空間を大きく越えたみごとに一致が存在する。本土と南島の間をつなぐ一筋の連帯の糸の確かさに打たれずには居られなかった。」ともある。（『そのてあ』7号、昭和58・4、久波奈古典籍刊行会）

(注5) 金沢大学大学院文学研究科『研究論集』三号（昭52・3）所収「虹（ニジ）は大和ことばか——古代日本語の鼻音にみられる一現象のかかり——」中「日本上代語の *niji* *nuzi*（ひいては現代語の「にじ」）は中期朝鮮語——現代文献によつてたしかめることのできる最古の朝鮮語（十五世紀以後）——の資料に *nijagat* としてあらわれる語を借用したものであるまいか」と推測されている。
 (注6) 康熙字典に、「唐韻」戸公ノ切、「集韻、韻會、正韻」胡公ノ切从音洪——とある。

(注7) 『蝦夷語箋』「バチエラ——アイヌ英和辞典」による。「ニシ（nishi）」もあるがこれは、雲・天・空の意味である。

(補注) 昭和七年十二月『金沢博士還暦記念 東洋語学の研究』（三省

堂)中に、宮良当壮「虹の語学的研究」が見えるが、その冒頭に『國學院雜誌』(第三十一卷第八号)に發表した『虹考』を改題して送ることにした。訂正したのは、要するに新資料の挿入と説明の方法であつて、考え方が違つた訳でないことを、断つて置きたい。」とある。

392

昔、人間は巢出水を浴びて脱皮した。天の神の太陽がひばりに巢出水を運ばせると、途中で虹が現れて、巢出水を奪つて捨ててしまう。太陽と月が虹をしかつたので、それから虹は太陽を避けて太陽の反対の方向に現れるようになり、ひばりは太陽にしばらくられて小さくなつた。(ゆがたい三P5 池間島P4)

私註 (一) 池間島の昔話 (二) 平良市池間島 (三) 動物昔話「ひばりと若水」の類話 (四) ? (五) 語り 平良市池間島・女 (六) 『日本昔話通観』②⑥「沖繩」(1983、同朋社出版) (七) P 808
〔考〕動物昔話の類話として分類されているように、(虹)も古代的認識たる「動物的存在」として描かれている。38]中の、第三形式の変形——巢出水を「飲む」のではなく、「奪つて捨ててしまう」——であろう。

393

おもて花咲かち鱸に虹引かちかれよしのお船の走るがきよらさ (a)

かき曇て降たる雨やうちはれて慶良間渡にかかる虹のきよらさ (b)

私註 (一) 琉歌 (二) (a) 13 「節組の部」(かぎやで風節)、(b) 1479 「吟詠の部」(夏の歌) (三) 琉球歌(定型) 188 「上句」 八六 「下句」 (五) (a) 読入しらず (b) 山里永昌 (六) 鳥袋盛敏著『琉歌大観』(昭和39、博栄社) (七) (a) P 4 (b) P 340 (八) (虹) はニジと発音。『虹』は、歌の場合はニジというけれど、口語ではヌージという。また『慶良間渡』は慶良間渡の島と那覇の間の海。慶良間の沖。(著者筆(b)の「語意」) 比嘉春潮の序に「琉歌と組踊は沖繩の標準語であつた首里語を基盤に發展して来たと見ることができよう。それで琉歌を読み琉歌を歌うには首里語の発音によるのが正しい伝統である」とある。(a)(b)共、『南島歌謡大成Ⅱ』中、「参考資料 琉歌全集」中にも再録。(a)の歌は、航海の安全を祝慶すべく国王の前でも奏した(「かぎやで風節」注)。著者による『歌意』は、(a) 船の進むへさきの方には、白波を蹴立てて、真白い花を咲かせ、鱸の方には波のしづきが、日の光をうけて、七色の美しい虹をひかせ、めでたい航海の船の走る光景は、実にみごとである。(b) 一天にわかにかきよらさ、滝のように降つた雨は、さつと晴れて、慶良間渡の沖にかかつた虹が、絵にかいたように美しい。

〔考〕(a)(b)共、結句に「きよらさ」を置き、「古代臭」 蛇性、はかなり薄められている。(a)の「虹引かち」の「引かち」に残映を見れば見られる、という程度である。まして古代中国の凶祥・妖样的享受は感じられない。

これは、琉歌の全盛期が、17C中頃から19C初め頃であつたことに よる。

394

- 一 なるやさき
- 二 かなやさき
- 三 すいのもと
- 四 すいのわき
- 五 うめきいぢへる
- 六 さめきいぢへる
- 七 ましにやこう
- 八 しらにやこう
- 九 雨つゝで
- 一〇 しるつゝで
- 一一 天ちをみやに
- 一二 あめぢまみやに
- 一三 白雲
- 一四 のぢくもに
- 一五 雨つゝで
- 一六 しめいきやちへ
- 一七 てるかは
- 一八 つきしる
- 一九 あまがわら
- 二〇 てにがわら押分けて
- 二一 波路押わけて
- 二二 しる田はる
- 二三 しのみばる 降り下ちへたばうれ

ニルヤ崎
カナヤ崎
すいの元
すいの脇
うめき出でる
さめき出でる
ましにやこう
しらにやこう
雨を包んで
しる〔雨〕を包んで
天地御庭に
天地真庭に
白雲に
虹雲に
雨を包んで
しめ出だして
テルカハ〔太陽〕
ツキシル〔月〕
天川原
天川原を押し分けて
波路を押し分けて
立派な田原
立派な実原〔田〕降り降ろし
て下さい

- 一 てにがうへや
- 二 あめがうへや
- 三 のずくものの
- 四 しらくもの ましちや

395

私註(一)ウムイ(『琉球国由来記』(二)此時〔稀に旱魃の時〕の御唄(渡嘉敷間切)(三)南島古謡(四)1713年(11成立時)以前(五)?(六)外間守善・玉城政美編『南島歌謡大成』——I沖繩篇上——(昭55、角川書店)(七)P 352(八)同工異曲のものが、『渡嘉敷間切由来記』(P 353)にあり、(ニジ)の所は、「くちくもに」(11くち雲〔虹雲〕)となつてゐる。また、同工のものが、座間味村ウムイにもある。ただし、(ニジ)は、漢字で「虹」となつてゐる。

〔考〕本資料中の、「のぢ」は、「白雲」と対比・並列して使われていることから、「のぢくも」と熟した語で、「のぢ」は独立した用法によるものではなく、「くも」の形容的用法によるものである。すなわち、色彩における「白」の対比で、鮮やかな幾色の「虹色に映えた雲」のことであろう。このウムイの内容が、国の由来または旱魃の時の雨乞い、にかかわる祝詞的なもので、表音も「のぢ」と古態を保っており、この〔虹色〕の〔虹〕の中に、遠き世の蛇的・蚯蚓的認識(1139参照)が、かすかながら無意識下に潜んでゐるのである。次資料39も、(ニジ)に関しては、ほぼ同様であろう。『渡嘉敷間切由来記』(P 353)中の「くちくも」は、国語学的には、宮良当壮の沖繩諸島におけるニジ語変化表(39注4)にも見当たらず、不詳である。

天の上は
天の上は
虹雲の
白雲の真下

- 五 くにぼぎは
六 かばしやぎは うゑて
七 うゑてみちや
八 うゑてよか なれば
九 しらにさち
一〇 あかにさち
一一 うゑたこと
一二 しらひげはさち
一三 おれじもがなれば
一四 わかなつがなれば
一五 しろかばがむゝら
一六 もゝすうちユみすうちユで
一七 やそちユみそちユで
一八 おしふどち
一九 おしあけてみれば
二〇 きヨらや く
二一 おろくやうい
二二 まだまやうい

私註(一) ウムイ(『諸間切のろくもいのおもり』(二) テンカウ
ヘノフシ(金武間切) (三) 南島古謡 (四) 1885? (『成立時』以
前(五)? (六) 外間守善・玉城政美編『南島歌謡大成』——I 沖
縄篇上——(昭55、角川書店) (七) P 363 (八) 二三行、四五行略。
〔考〕二三行目の「真玉」に、遠く「のずくも」の(虹)が響い
ていることに注意。玉を抱く龍のパターンであり古代色が濃い。

九年母木を
香ばし木を植えて
植えて三日
植えて四日になると
白根が差して
赤根が差して
植えたので
白鬚が差して
おれじも(初夏)になると
若夏になると
しろかばがむむら
百包みに包んで
八十包みに包んで
押し解いて
押し開けて見ると
清らや清らや
おろくやうい
真玉やうい

396

- 一 けふの時なふち
二 なまのときなふち
三 あまのみつらしか
四 てこのみつらしか
五 あめ乞ておれろ
六 いふ乞ておれろ
七 天のみやのかうしやしゆ
八 あめのみやのかうじやまへ
九 ちろや大司
一〇 かな(や若)司
一一 雨ふらちたまふれ
一二 いふふらちへたまふれ
一三 井口ひろくあけて
一四 井はなひろくあけて
一五 あめのはし掛けて
一六 くれのはし掛けて
一七 かうしやしゆ
一八 かうじやまへと
一九 とゑ
二〇 ゑりぢよ あわせめしよわちへ
二一 雨おろちへたまふれ
二二 いふおろちへたまふれ
二三 あはす風乞ぬ
二四 しきよと風乞ぬ
二五 やはくとたまふれ

今日の時を直して …… (a)
今の時を直して
天の珍ラシが
テコの珍ラシが
雨を乞うて降りる
いふ(雨)を乞うて降りる
天の庭のカウジャ主
天の庭のカウジャ前
ザロヤ大司
カナヤ若司
雨を降らして下さい
いぶを降らして下さい
井口を広く開けて
井端を広く開けて
雨の橋を掛けて
くれ(雨)の橋を掛けて
カウジャ主
カウジャ前と
十声
御声を合わせなさつて
雨を降ろして下さい
いぶを降ろして下さい
あばす風は乞わない
しきよと風は乞わない
柔々と下さい

二六 なごくとたまふれ
二七 みまふやうちへたまふれ
二八 やしなやうちへたまふれ
* 1・2 仲原善忠による読みは「う」。

和々と下さい
見守りなさつて下さい
養いなさつて下さい

一 いしたうね御たかへ
二 かなたうね御たかへ
三 あまのきみかなし
四 てこの(き)きみかなし
五 天のみや
六 あめのみや
七 かうじやしゆ
八 かうじやまへ
九 ちろや大司
一〇 かなやわか司
一一 あまのはし掛よわちへ
一二 くれのはし掛よわちへ
一三 ゑりぢよ
一四 とこゑ あわせめしやうち
一五 井はなひろくあけ
一六 井口ひろくあけよわちへ
一七 いぶおろちへたまふれ
一八 雨おろちへたまふれ
一九 あんじおそいか田原
二〇 さとめしかみとり
二一 水ふしやにわれて
二二 いぶふしやにわれて
二三 三かひてはとうさ
二四 四かひてはまとうさ

石たう根御崇へ …… (b)
金たう根御崇へ
天の君加那志
てこの君加那志
天の庭の
天の庭の
カウジャ主
カウジャ前
デロヤ大司
カナヤ若司
雨の橋を掛けなさつて
くれ(雨)の橋を掛けなさつて
御声
十声を合わせなさつて
井端を広く開け
井口を広く開けなさつて
いぶ(雨)を降ろして下さい
雨を降ろして下さい
按司添いの田原が
里主の実取り(田)が
水欲しさに割れて
いぶ欲しさに割れて
三日といえは遠い
四日といえは間違い

二五 夜くれのふにたまふれ
二六 夜すゝめたまふれ
(二七) (一九略)

夕暮れに下さい
夕しじまに下さい

二二〇 あはす風おとろしや
二二一 しきよと風やくめさ
二二二 やはくとたまふれ
二三 なごくとたまふれ
二四 あふし越たまふれ
二五 あせら越たまふれ
二六 みまふやうちへたまふれ
二七 やしなやうちへたまふれ

あはす風は恐ろしい
しきよと風は畏い
柔々と下さい
和々と下さい
畦を越えるほど下さい
畔を越えるほど下さい
見守りなさつて下さい
養いなさつて下さい

私註 (二) クエーナ (Ⅱ(a)・オタカベ (Ⅱ(b)) (『久米仲里旧記』
(Ⅱ(a)(b)共) (二) (a) Ⅱ「右同時(大雨乞之時) 同所(いしたうね)」
ニ而くいにや(仲里間切儀間村) (b) Ⅱ「いしたうね雨乞御たかへ
言(仲里間切儀間村) (三) 南島古謡(四) 1703年頃(成立時) 以
前(五)? (六) 外間守善・玉城政美編『南島歌謡大成』——I 沖
縄篇上——(昭55、角川書店) (七) (a) Ⅱ P 172 (b) Ⅱ P 60・61・62
(八) (b) は二七行く——一九行略
〔考〕 32 (a)(b) には、直接(ニジ)の語は出ていないが、(あめ
のはし) (あまのはし) (くれのはし) 等が、それに当たろう。(ニ
ジ) に関しての「見立て」表現であり、比較研究資料 (18) (22) (27
等) で見てきた通り、グローバルに散在しているパターンである。
(ニジ) を、Rainbow (雨の弓) とした、インドヨーロッパ語属的
享受と様式的には同類であろう。『南島歌謡大成 I』中の外間守善

の解説によると「オタカベ・クエーナ・ウムイ共、沖縄原始・古代における呪術的詞章であり、それらは農耕儀礼の周辺にその発生の基盤を置く。オタカベが呪術的生命を消滅させていったのにひきかえ、クエーナ・ウムイは、ウタフコト(謡い)、マフコト(舞い)を伴いつつ、詩的(叙事歌謡的)発展をみたもの」(稿者要約)という。とすれば、³⁹₃₉³⁹₃₉は、いわば本格派の文藝である『おもろさうし』『琉歌』(Ⅱ³⁹)とは、ややズレた次元において、本土の文藝との共通文化圏の視座を設定してみるのも面白からう。

397

虹(にじ) (1)

むーとうぬ きんぬかね
わーがためー
すーらぬ きんぬかね
いやーがため

根元の金のかねは
私のためだ
梢の金のかねは
お前のためだ

虹(にじ) (2)

のーぎー のーぎー
とんぶいかで きえーれ
とんぶいかで きえーれ

虹! 虹!
おういたび食って消えな
おういたび食って消えな

私註(一) ユングトウ (二) 3 「自然に関するユングトウ」二四・二五 (三) 南島古謡 (四) 古代 (五) ? (六) 田畑英勝・亀井勝信・外間守善編『南島歌謡大成』——V奄美篇——(昭54、角川書店) (七) (a) Ⅱ P 654 (八) 恵原義盛採集資料。〔1〕の注に「*虹が大きく弧を描いて鮮やかに立つと子供達は声を揃えて歌う。」

〔2〕の注に「*虹を方言でノーギという。とんぶいは蔓生無花果で美味の実のものとかが空になっていて食えないものがある。とんぶいは名瀬の方言で、名瀬市の中でも根瀬部ではツトンマ、芦花部ではチツパという風に名が違う(名瀬Ⅱ伊津部のもの——寺師忠夫氏より採集。)」とある。

〔考〕(1)の(ニジ)が、樹からたつ(Ⅱ靈魂の昇天)——点は、土葬民俗に淵源をもち、それに火葬民俗(茶毘の煙の昇天イメージ)が加担したものであろう。(21)中、「夏世隆」説話ならびに私註〔考〕参照)さらに、外国の古代に散在していた、「虹脚埋宝」信仰(29私註〔考〕参照)も同時に混入していよう。(2)は、しかとはわからないが、台湾に見られたオットフ的なもの(22私註〔考〕参照)のうち、アトハン(浄土)に渡れない悪玉のもの、に対する呪いなのではあるまいか。「おいしい果物をやるから、それでも食べて、機嫌よく、災いを起こさないうちに早く消えてくれ!」と。『南島歌謡大成』V中の、外間守善の解説中に、「ユングトウは、奄美のわらべ歌であるといわれている。……わらべ(子供)が歌うからわらべ歌というのだといつてしまえばそれまでだが、少なくともその初源は、聖なる言葉をよむことにあるはずであり、よむ言葉の広がりか呪いのための言葉をよむようになり、マジニヨイ(呪い言)とも重なりあう側面が生まれてきたのであろう。……ユングトウを歌い伝えてきたのは子供であるが、ユングトウそのものをよんだ主体は、かならずしも子供であるわけではない。」とあり、この言が身に滲みる。(2)は「食って」と動物生態的描述。

398

虹（沖永良部島）

のーじのーじ

かたなざち ていきりり
ていきりり

虹よ 虹よ
刀をさして手を切れ
手を切れ

私註（一）わらべ歌・言葉遊び（奄美）（二）2「虹（沖永良部島）（三）南島古謡（四）？（五）？（六）田畑英勝・亀井勝信・外間守善編『南島歌謡大成』——V奄美篇——（昭54、角川書店）

（七）P 676（八）田畑英勝採集資料。

〔考〕比較資料①で見てきたごとく、中国古代の『詩經』に見られた「蠨蛸在東 莫之敢指」と質的に同類で、日本の各地に見られる「虹指差禁忌」俗信が根底に流れているものである。その隠し味を踏まえての重べ歌であろう。神をもおそれぬヤンチャな子供等の（虹を見ての）はやしたてる歓声が一読聞こえてくるような歌である。「オレの指を切れるものなら、ヤーイ、切ってみろ！」と。

399

（一）（ア）天の国の天帝が、（イ）天の岩柱の端を折って弥久美神に授け、下界の風水のよいところに島を造れという。（二）（ア）弥久美神は、天の夜虹橋の上から海にそれを投げる。石がかたまり島になる。（イ）帝は赤土を下させた。（三）（ア）古意角という男神に、下界に下り、人の世を

六二

立てて守護神になれという。男神は女神を願ひ、姑依玉という女神をとまなう。（イ）二神は、盛加神という豪力の神のほか八十神百神をとまない、天の夜虹橋を渡り、七色の綾雲に乗って下界近く来ると天の神の国から追われた鬼どもが邪魔する。盛加神は天の立矛でなぎ倒そうとし、火麻呂神は火で焼き殺そうとし、天千瀬神は大雨を降らせて流しすてようとする。古意角神はそれをとめ、八束穂の白飯をたまい、直なる心は明らけく輝く心ぞと宣ひ、八継の色たて衣の御袖でなると、鬼も神の心を現し、皆集まって天下つた。（エ）漲水天久崎に宮居し、一切の有情非常を生む。（オ）二神は、宗達神・嘉玉という男女の神を生む。（以下略）

私註（一）慶世村恒任『宮古史伝』（昭30、那覇、南陽印刷合資会社）（二）P 21—22（三）開闢神話（六）小島環礼筆「琉球開闢神話の分布と比較」（『日本神話と琉球』——講座日本の神話10——（昭和52、有精堂）（七）P 41—42

〔考〕小島環礼によると「天の夜虹橋」は、むしろ（記紀の天の浮橋の原形をしのばせるもので……）とあるが、世界各地の古代において、数多の「橋」系見立ての資料（資料③〔考〕中、他）を見てきた稿者の目にもそのように映る。資料③中に見える「宮古島には蛇に対する信仰が大に行われいる」と絡めてみると、「天の夜虹橋」は天蛇性を核にもつ、いわゆる二次的認識たる「橋」であろう。記紀の「天の浮橋」の場合はそれが文藝化されたものであり、『源氏物語』の「夢の浮橋」や定家の名歌「春の夜の夢の浮橋」等は、さらに洗練化されたものであろう。

通 考

〈虹〉に関する「北辺」と「南島」の共通項は、「動物」的認識であり、異項としては、「南島」においては「橋」型がみられ、「北辺」には見られない——ことである。

比較言語的にみれば「北辺」と「南島」は、まったく異質であり、「南島」は「朝鮮半島」とならんで大和系である。

①②……は、『梶山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。